

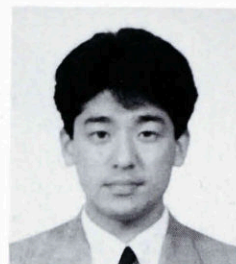


わたしのまちづくり

シリーズ⑭

吉岡節子さん

(野波瀬)



中野明彦さん

(沢江)

健康なまちづくりに…

教育の町と位置づけ今、福祉と文化の町づくりを目指している三隅町は健全な発想のもとに町づくりを進めて欲しいと願うと共に、活性化につながれば、なりふりかまわずは、三隅町に似合わないと思います。人口減少で町の活力が失われていく事は厳しい現実と受けとめますが、それでも私達は終いの棲家としてこの地をえらんだ以上、根気よく耕やし育て続けていかねばならないと思うのです。情報化が進み流通の発達で都市や町も村も生活水準は大差なくなった今、文化施設の不備はうるおいのない物足りなさを覚えます。心地よい潮風、魚があれば浦は活気づき末端の家々までうるおう力強さの中で私は今とても贅沢な暮しをしているのかも知れないと云い聞かせているのです。香月美術館建設予定に伴って文化交流の館を併設し、多様な世代が集い合う町民文化の根拠地が創造されたと考えます。私達を取り巻く環境は素晴らしい自然と勤勉豊かな人情、そしてこれらにささやかたりとも、より豊かな本物の芸術・文化を重ね合わせて心身共に健康な町づくりに取りくんで下さる事を希望いたします。

「生きているまちづくり」に向けて

「どうして若者は三隅から出ていくのだろうか。」この問題を解く鍵はどこにあるのでしょうか。

私はUターン就職をした一人です。一緒に都会に出て、帰らない仲間もいます。しかし彼らと話してみると、故郷に対するいろんな思いはみんな持っています。

大切なのはこの点です。帰ってくる要素はあるのです。その思いを知り、その中で取り入れるべき思いは取り入れてはどうでしょうか。

すべてを大都会と同じにする必要はないでしょう。けれども、今のままでは彼らが帰ってこないのも事実です。

「参考にしよう。」という程度でなく、「失敗しても構わん。若い者にやらせろ。」というほどの行政の裁量が望まれます。現状では人口は減る一方です。「失敗してもととだ。」というくらいの思いきりが必要な時期だと思います。

失敗を恐れては何も生まれません。目先のことが問題なのではないのです。将来「何も生まれないまち」に若者が魅力を感じるでしょうか。

これから何十年とこのまちで生きていく若者が、「生きているまち」の息吹を感じられるような三隅になってほしいと思います。

新刊図書紹介

(トレセン図書室より)

「こどもカラー図鑑 全十巻」

今泉吉典外九名

(株)講談社

「真紅のバラを37本」

高橋 穂世

新声社

「生と死の教育

―デス・エデュケー

ションのすすめ―

編樋口和彦・平山正美

(株)創元社

「農業の活路を

世界に見る」

今村奈良臣外七名

(社)農山漁村文化協会

「政府と農民」

今村奈良臣外七名

(社)農山漁村文化協会

「幸せなのになぜ涙が

でるの」

アグネス・チャン

(株)労働旬報社

